

風鈴農園

岐山高校 2年 吉村 貫希

鈴の鳴る音で目を覚ました。

目線だけで時計を見るとその針は予想より幾分か先を示していて、顔を上げようとするとその証拠のように、ノートが顔にへばりつく。

勉強中に寝てしまった。私は周囲の状況から得たその結論をしばらく頭の中で反芻した後、「昨日夜更かしたからいいや」という理由にもなっていないような理由で考えを打ち切った。

部屋の隅にあるエアコンは「どうこう」と音を立てていて、冷え性の足先が少し痺れている。私はリモコンを取ろうと席を立ち、その途中でちらりと窓を見る。

自転車の影がひとつ、車道に揺らめいている。遠ざかるように、チリンという鈴の音がする。その音を合図に、私はとある記憶を思い出した。

小学生4年生くらい夏の頃だっただろうか、父と母が大ゲンカをしたことがある。私は我関せずとしていたけれど、母が父に捨て台詞を吐いた後私の首根っこをひつつかんで、車に乗って家を出てしまった。私が母に「どいくの？」と聞くと、母は「楽しいところ」と言った。

その家は車で何時間も揺られて着いた田舎にあつて、立派な日本家屋だった。着いてすぐに風鈴おじさんが私たちを出迎えてくれた。結局、私は今に至るまで母と風鈴おじさんの関係を知らない。

風鈴おじさんは白髪を短く刈り込んだ優しそうなおじさんで、60代くらいに見えた。母は彼を名前で呼んでいたが、私は覚えていない。私は彼を風鈴おじさんと呼んだ。風鈴おじさんは自分がそう呼ばれると、いつも優しくそうに笑ってみせた。口角をくいと上げて、はははと声をあげながら、やわらかな風のように。

風鈴おじさんは風鈴を育てている。彼が畑に行く時、私は必ず着いて行った。そのとき風鈴は既に収穫シーズンを終えていて、畑には青い葉っぱだけが残っていた。

風鈴おじさんは葉のついた茎を、土から黙々と引き抜いていた。額に汗して、黙々と、黙々と。

ひと段落すると、風鈴おじさんは手を振りながら私の方へ笑顔でやって来る。私は持っている水筒から蓋のカップに麦茶をそそいで、風鈴おじさんに渡す。それが私の仕事だった。

私は不思議だった。小さかった私は、その質問を言葉に出した。

「どうして風鈴なんか育てているの？音なんかしたって、ちっとも涼しくならないでしょう？」

風鈴おじさんは少し困ったような顔をした後、私の頭を撫でながら言った。

「僕はね、別に風鈴は夏だけのものではなくていいと思っっているんだよ。秋でも冬でも、その音が聞きたくなったらいつでも。エアコンの風は体を冷やしてくれるけど、生きているとね、心にも風が必要なんだよ。風鈴の音を聞くとね、風が心のもやをすつと吹き飛ばしてくれる。僕は

ね、風鈴はそのためにあると思うているんだよ」

4日経って私たちは家へと帰った。風鈴おじさんはまたあの笑顔といっしょに、手を振って私たちを見送った。家に戻ってから父と母がどんな言葉を交わしたかは覚えていないが、車で、母は満足げな顔をしていた。

私がかもう一度風鈴農園に行ったのは、それから2年後だった。

「あのおじさんの農園、潰れるって」

母はそれがなんてことのないように、軽くそう言っただけだった。父も「そうかあ……」。儲からないもんな、今の時代」と平然と返した。

だけど私はその瞬間、自分でもわけがわからないほどの、不安と、怒りと、悲しみに襲われた。それまで忘れていたのに、あの場所が消えるのが嫌で嫌でたまらなくなった。これまで出したこともない大声を張り上げ、母に今すぐ連れて行けと言った。母は私をなだめようとしたが、今まで発したことのない私の剣幕に押されて、ついに折れた。

その時は梅雨で、焦る私の心とは別に、私の目は窓ガラスに垂れる水滴を静かに見つめていた。着いたころには深夜だった。

風鈴農園のそばには辺り一面を見渡せる丘とも呼べないような小高い場所があつて、おじさんはそこにいた。

風鈴おじさんは私の方を見て少し目を丸くしたけど、何も言わずにまた、視線を戻した。いつの間にか雨は止んでいた。田舎の村には街灯の一つもなく、周りには暗闇が広がるだけだった。

大きく、ごうと風が鳴った。その瞬間、世界は鈴の音だけになった。

チリンチリンとなる鈴の音は膨大な数の輪唱で、リリリリ……と絶え間なく続いている。周りの闇はまるで巨大なドームのようで、その中心に二人、私と、風鈴おじさんだけがあった。

風鈴おじさんが笑った。嵐のように笑った。お腹をよじって、普段のおじさんからは考えもつかないような声で、げらげらと笑った。

私も笑った。嵐のように笑った。理屈は宇宙の果てまでぶっ飛んでいた。そのとき私は生まれて初めて、心の底から笑っていた。

鳴り響く鈴の音の中、私たちの笑い声が鳴り響く。その音は白いもやも黒い闇も吹き飛ばして、夜空に上っていった。

ベッドの上に置いてあったリモコンを手取る。ボタンを押すと同時に、私の心に映っていたその情景も、ふっと途切れた。